

研修報告書

千葉県ホッケー協会 成田 健一 (A-91)
(報告提出日：2013年4月3日(水))

- 1 研修名 Raja Ashman Shah AHF-MHC Hockey Academy
AHF Course for umpires
- 2 開催地 国名：マレーシア 都市名：イポー市
- 3 開催期間 2013年3月12日(火)～17日(日)
※出発：2013年3月11日(月)・帰着：3月19日(火)
- 4 報告内容 (テキストの詳細の和訳で分かりにくい箇所はご容赦下さい)

● セミナーの概要

マレーシア・イポー市にある Raja Ashman Shah AHF-MHC Hockey Academy にて、アカデミーに隣接するスルタン・アズラン・シャースタジアムで同時期に開催される Sultan Azlan Shah Cup に合わせ、AHF (アジアホッケー連盟) と MHC (マレーシアホッケー協会) が連携し今後国際審判員を目指すアンパイアの育成を目的に開催するセミナーで、今回が 2011 年に続き 2 回目の開催。講師はマレーシア協会所属の TD・UM に加え、スルタン・アズラン・シャー・カップの TD・UM・ニュートラルアンパイアも参加しての講義を行った。



↑ Raja Ashman AHF-MHC Hockey Academy



↑ Sultan Azlan Shah Hockey Stadium



↑ アカデミー内のインドアホッケーコート
(奥の窓のある部屋が講義を行った教室)



↑ スタジアムを出てから宿泊先までの街並み

● セミナー参加者 (アンパイアコース)

- ・ AHF 加盟各国から 19 名が参加。マレーシア 5 名・タイ 3 名・ブルネイ 3 名・韓国 2 名・シンガポール 2 名・香港 2 名・日本 2 名。
日本からは元宗宏寿審判員 (岡山県協会) と成田 (千葉県協会) の 2 名が参加。
- ・ 最年少はシンガポールから参加の 17 歳女性、最年長はタイの 43 歳男性。
年齢は 20 代中盤が中心だが、30 代も自分を含め 4 名参加していた。
- ・ なお、韓国 1 名とマレーシア 1 名 (いずれも男性) は 4 月シンガポールで開催される U-16 アジアカップ (Hockey5 が実施予定) にも参加予定。

● 全体日程

- ・ 1 日目：開講式、セミナー全体の説明、新ルール・レギュレーションの説明、TD からのアンパイアの見方、試合観戦によるアンパイアリング分析
- ・ 2 日目：前日の試合についてグループディスカッション、UM からのアンパイアの見方、大会アンパイアとの懇談
- ・ 3 日目：心理的・身体的トレーニングについて、栄養学、ストレス対処法、ビデオアンパイア・電子機器について、国際大会初参加の際の準備、試合観戦によるアンパイアリング分析
- ・ 4 日目：前日の試合についてグループディスカッション、大会 TD・UM との懇談、ビデオを見ての分析、イポー市内観光
- ・ 5 日目：ビーptest、困難な状況時の対処法、筆記テスト、試合観戦
- ・ 6 日目：閉講式、試合観戦



↑ 滞在ホテル(Fair Park Hotel)の歓迎バナー



↑ イポー市内中心地で掲げられた大会看板

● 1 日目：3 月 12 日 (火)

(1) Rules of Hockey

(講師：Coronel, B, Muthukumar 国：Malaysia ※マレーシア協会審判部長)

- ・ 2013 年より導入された新ルール (→オウンゴール・直接ボールを上げて可 (2 モーションの廃止) 等) と共に、新レギュレーションについて主に説明。
- ・ 新レギュレーションの中でも、今後殆どの国際大会で適用されるであろうシュートアウト戦が加えられたため、その項 (Appendix9) に記載されている手続きを 2 グループに分かれて読み込んだ上で確認し、要点を明示 (図示) してプレゼンテーションを行った。
- ・ なお、今回参加したアンパイアの一部の国では SO 戦は未実施とのことで、このセッションにおいては、日本国内で昨年度より SO 戦が実施され、自分も 2 度経験していたことが大きなアドバンテージとなった。

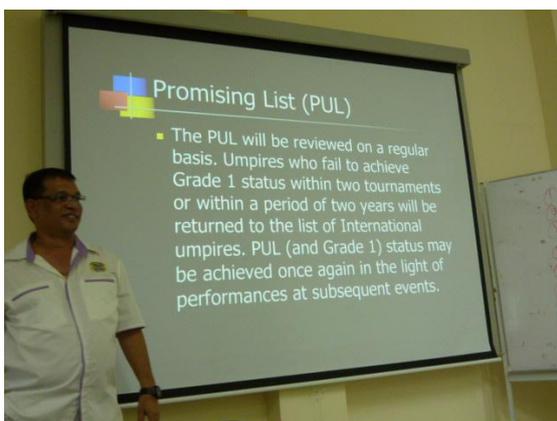
(2) TD's Perspective of Umpiring Management

(講師：Brian, G, Fernandez 国：Malaysia ※4月のU-16アジアカップ TD)

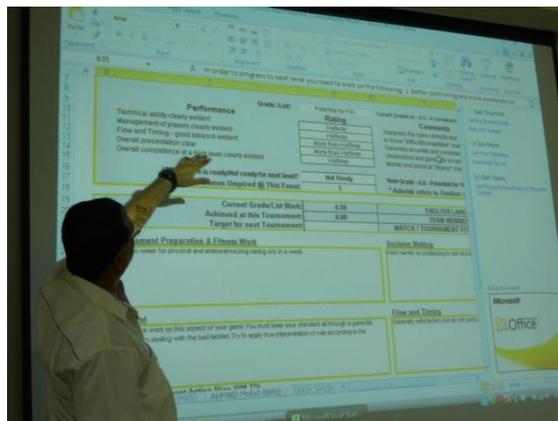
- ・TDとしてアンパイアをどのように評価するか、特に最後にアンパイアに返すフィードバックシート作成時の評価する点について、主に説明がなされた。

【主な項目】

- ・国際審判員として必要とされる資質・能力
- ・国際審判員のランキング分け・昇級の仕組み
- ・フィードバックシートの評価項目・評定の仕組み
- ・大会中にアンパイアが報告書（レッドカード）を作成する際の要点



↑講師の Brian, G, Fernandez



↑フィードバックシートの作りの説明

(3) Match Observation (Sultan Azlan Shah Cup、以下略：「SAS Cup」)

- ・参加したアンパイア 19 名が 3 グループに分かれ、グループ毎に与えられたテーマに沿ってスタンドで試合観戦（第 2 試合：インド 3-1 パキスタン）、当該試合のアンパイアリングで気づいたこと（Good or No good）について、各自メモを取り翌日のディスカッションに備えた。
- ・各グループに与えられたテーマは下記の通り。（自分は GroupA）
GroupA：①笛 ②相手アンパイアとの協力 ③ゲームマネージメント
GroupB：①ポジショニング ②モビリティ（敏捷性） ③アドバンテージ
GroupC：①ゲームコントロール ②判定基準
- ・なお、上記の試合観戦が終了した後（会場はスタジアムのすぐ横の建物）、当該試合以外の時間はフリータイムであったが、SAS Cup の試合を観戦した。
（結果）第 1 試合：ニュージーランド 3-0 韓国
第 3 試合：オーストラリア 1-1 マレーシア



↑インドーパキスタンの試合前



↑左奥の黄色の集団はマレーシアサポーター

● 2日目：3月13日（水）

(1) Group Presentation on the Match Observation

- ・前日のインドーパキスタン試合観戦に伴い、グループ毎のテーマに沿ってディスカッションを実施、良かった点・悪かった点について要点にまとめて各グループでプレゼンテーションを行い、他の参加者と質疑応答を行った。
- ・個人的には「上手く相手アンパイアを助けた」行為だと思っていたものの、他の参加者によると「頼りすぎ」など意見が裏腹だったのが印象的だった。

(2) UM's Perspective of Umpiring Management

（講師：Amarjit Singh 国：Malaysia ※今回の SAS Cup の UM）

- ・国際大会における UM の役割、UM がアンパイアを評価する項目とともに、現在の世界・アジアのアンパイアの人数・ランク付け等について説明。
- ・アジアのアンパイアは欧米圏に比べ、英語を母国語としない国が多いことでコミュニケーションスキルが不利であり、欧州は国を跨ぎすぐ近くの試合に行けるといふ地理的条件も人数の違いに繋がっているのでは、とのこと。

【UM の役割】

- ・大会前の準備（事前の連絡、交通手段、宿泊、部屋分け、日当等）
- ・アンパイアの状態把握（健康状態・フィットネスレベル）
→コンタクトを早く、情報をフルに伝えるなど、第一印象が重要である。
- ・アンパイアチームの構築（ブリーフィング、レギュレーション等の通達）
- ・大会期間前・期間中のアンパイアへの指導（可能であればビデオを使う）
- ・TD との連絡、最終のフィードバックシート評定案の作成

【フィードバックシートでの評価項目】

- ・試合中の意思決定（判定）
- ・ゲームマネージメント
- ・試合を流す所と笛を吹くタイミング
- ・プレゼンテーション能力
（あるがままの自分を出す）
- ・何か起こった時の対応策

【UM としての主な評価材料】

- ・試合前の準備（フィットネス）
- ・コントロールの「階段」
（笛、罰則の適用、PC・PS・カード等）
- ・一貫性（集中力・ルールの適用・ミス後の対処）
- ・人のマネージメント（シグナル・ボディランゲージ・言葉・慰め等）
- ・技術的な知見（デンジャラスプレー・オブストラクション・タックル等）
- ・チームワーク（試合前、試合中の協力、アドバイスを吸収する意欲）

【ここ最近特に強調して見る点】

- ・試合開始 15 分の基準づくり
- ・タックル（危険なボディチェック・スティックチェック）
- ・ブレイキングプレイ（試合の流れを切るようなファウル・遅延行為等）
- ・セルフパス ・高く上げられたボール
- ・ペナルティコーナー ・個人的な罰則（カード等）

→メンタル（心理的）・フィットネス（体力）レベル、テクニカル（技術）

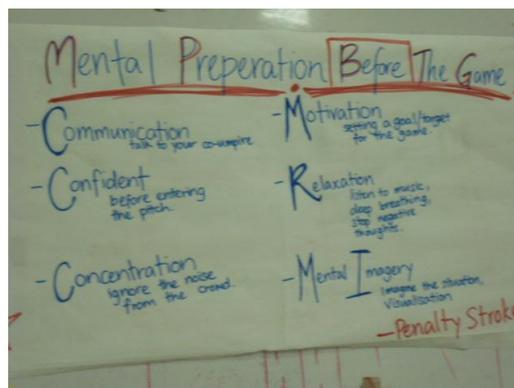
スキルの3つのバランスが取れてこそ、優れたアンパイアリングができる。



- ① コミュニケーション (Communication)
 - : アンパイアが落ち着いた表情や微笑みを見せることにより、プレイヤー・コーチ等の興奮を静める効果があると同時に、観客にも好印象を与える。
- ② 自信 (Confidence)
 - : 高いレベルのアンパイアは試合中にチャレンジや決断が必要になった際自分自身とその能力を信じる力が高く、成功欲を高く持っている。
- ③ 集中力 (Concentration)
 - : 集中を乱す要因には悪天候や騒がしい観客、うるさいコーチ等があるが、楽しみや不安への対処法、関わりたくない所を上手く無視する方法、もう1度試合にフォーカスを戻す方法を学ぶ必要がある。
- ④ モチベーション (Motivation)
 - : ゴールをどこに設定するかで、パフォーマンスを上げることができる。
- ⑤ リラクゼーション (Relaxation)
 - : 自分自身をリラックスさせるためには様々な方法がある。
(呼吸法・ひとりごと・思考停止 (ネガティブシンキングを止める))
- ⑥ 良い姿の想像 (Mental Imagery)
 - : これまで起こった困難なシチュエーションの際を思い浮かべ、同じ状況が起こった時により効果的な対処をできる自分を想像すること



↑講師の Cikgu Kanaisan



↑各グループからのプレゼン内容

【Umpires physical training (フィジカルトレーニング)】

- ・ビーブテスト (シャトルラン) の達成基準・トレーニング方法について説明。

年齢	男性	女性
30歳未満	レベル10クリア (95回以上)	レベル9クリア
30歳~39歳	レベル9クリア (84回以上)	レベル8クリア
40歳以上	レベル8クリア (73回以上)	レベル7クリア (62回以上)

- ・統計上国際試合でアンパイアは1試合(70分)平均4,000m以上走っている。
- ・この距離はジョグ (ゆっくり走る) とスプリント (ダッシュ) の組合せで、前・後ろ・横と多方向に動く傍ら、静止して凝視する時もあり様々である。
- ・50%は高い緊張状態でのジョグ、10%は最速スピードのスプリントである。
- ・それに耐えうるだけの下半身 (太腿~ふくらはぎ) のトレーニング、特にスピード・俊敏性を重視した筋肉を鍛える必要がある。
- ・週3回程度で効果的なトレーニング方法として長・中・短距離を組合せた、それもジグザグやジャンプを組合せたトレーニングメニューが紹介された。
- ・また、試合後の回復方法として水分補給・交代浴等のメニューが紹介された。

【Medical/Nutrition (医学/栄養)】

- ・水分補給 (Hydration) が重要、暑く湿度の高い地域に行く場合は尚更。
- ・身体に十分なエネルギーを蓄えておくために、炭水化物を多く摂り筋肉に補給する必要。十分な炭水化物からグリコーゲンが生成されていくことで、トレーニング・アンパイアリング中の疲労を防ぐことができる。

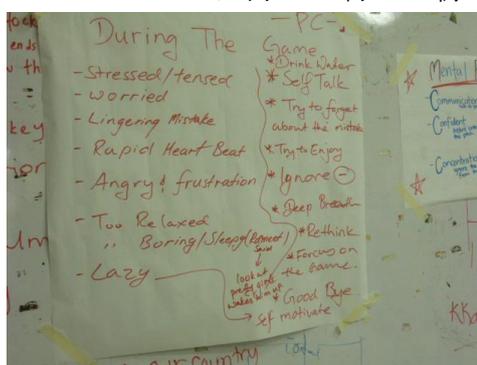
※4グループに分かれ、試合日の「朝食」「試合直前」にどのような栄養補給が望ましいかディスカッションを行い、プレゼンテーションを行った。

→朝食では油脂分は少なめ、米やパスタ等穀物、パンやシリアル、野菜、ヨーグルト、果物にフルーツジュース等を食するのが望ましい。

→試合直前は水分を多く摂り (トイレに近くならない程度に)、エネルギーにすぐ変わりやすいフルーツ (バナナやオレンジ等) を摂るのが望ましい。

【Stress Management (ストレス対処法)】

- ・トップレベルの試合のアンパイアリングはストレスの多い経験である。
- ・ゲーム中は緊張や怒り、完全なアドバンテージでゴールに持って行った際の喜びなど、強い感情を催すことがある。
- ・そうした強い感情、特にプレッシャーに打ち勝つには、リラックスする術や頭の中の考え方の再構築、姿勢を正すこと等が重要とのこと。
- ・グループに分かれもしミスをした時にどう考えるか? について話し合い、プレゼンテーションを行った。



(2) Video umpire and Electronic device

(担当講師: Vasutheven Sasidharan (FIH 公認 UM) 国: Malaysia)

- ・ビデオアンパイアと電子機器 (インターカムシステム) の使用、その仕組みと手続き、適切な使用法について、国際大会での VTR を見ながら説明。

【ビデオアンパイアの仕組みと権限について】

- ・会場内にカメラ 8 台とモニタールーム (ピッチと隔離された場所) が必要。
- ・2 人のアンパイア (マッチアンパイア) が最終判定を下す権限は同じ。

【Umpire Referral】

- ・マッチアンパイアが判定に確信のない際にビデオアンパイアを使う権利。
- ・1 試合に対して使用回数の制限はない。
- ・アンパイア・リファーラルはゴールに関係する (つながる) シーンで自身の判定が合っているかどうかのみに使われる。
- ・ビデオアンパイアは「ゴール」「ノーゴール」「アドバイス不可能」の答えを返すことで、マッチアンパイアが最終判定を下す。

【Team Referral】

- ・マッチアンパイアの判定に対して、チーム側がビデオアンパイアを使って 1 回のみ (成功の場合継続) 判定の正誤を問い合わせる (覆せる) 権利。
- ・23m エリア内のゴール・PC・PS の判定が合っていたかが対象。
- ・チーム・リファーラル後当該プレイヤーから 20 秒以内に問合せの内容を 20 秒以内に言われないと権利は喪失する。
- ・ビデオアンパイアは、「ゴール・PS・PC (またはそうでない)」「アドバイス不可能」の答えを返した上で、マッチアンパイアが最終判定を下す。

(3) Preparing for first international tournament

(担当講師：Vasutheven Sasidharan)

- ・審判員の背負っている責任・義務について、国際大会のチェックリスト、試合前・試合中・試合後に行うべきことについて説明。

【責任・義務】

- ・現代のホッケーは選手のフィジカルが上がりプレイスピード・技術・戦術的に進歩しているため、より審判員に求められるものが大きくなっている。
- ・そのため、審判員もプレイヤーと同様の準備をして大会に臨む必要がある。
- ・当該大会のアポイントに関する連絡（AHF・各国協会）に対しては迅速な対応（返信）の必要があり、UM・大会組織委員会からの案内内容を理解し、コミュニケーションするためにはやはりそれなりの英語スキルが必要。
- ・何日の何時までに着けば良いか等、地元の組織委員会の指示に従った上で、各協会と共に旅程の調整を行う必要がある。
- ・アンパイアチームの一員でその中で期間中動いているという自覚を。
- ・会場での格好については許されたものでスマートに着こなすべき。
(大会で認可されていないスポンサーの着いた服などは着ない)
- ・宿泊は通常ツインルームで同じアンパイアと同部屋である。
(通常はガールフレンド・妻は連れてこないこと)
- ・到着後2～3日しないと日当が支給されないことが多いため、食事したりいつ何処で使ってもいいように現地通貨を少し用意しておくべき。
- ・大会期間中のアポイントはUMの原案の元、TDが最終決定する。
- ・最近ではUMの試合レビューにビデオを使うことが多く、その想定も必要。
- ・大会終了後にTD・UMからフィードバックを受け取るが、UMの評価の元フィードバック内容の最終決定はTDの責任で行われる。

【チェックリスト】

- ・大会前に入国にあたりビザが必要か、予防接種等が必要か必ず確認する。
- ・手荷物にはホテルと大会参加の詳細が書かれた最低限の書類を持参する。
(衣類等はなくなっても調達可能だが、目的地が分からないと右往左往する)
- ・大会に向けて（ビープテストをクリアできるように）フィットネスレベルを上げておき、定期的に吹く他、可能なら代表チームの試合等を吹いておく。
- ・開催国の気候（熱暑地等）に合わせてフィットネスレベルも上げる。
- ・もちろん、現行ルールブックや指示されたレギュレーションも読んでおく。

【試合前】

- ・用具の確認、メンタル・フィジカル両面でリラックスする
→様々なシチュエーションを想定し、ポジティブなリハーサルをする、
「プランB」（上手く行かない時の代替策）を相手アンパイアと話し合う。

【試合中】

- ・視覚・聴覚を用いて集中する（フォーカスする）が、プレイが途切れた所で一息深呼吸を入れリラックスする →問題や感情を抑える時間を作る

【試合後】

- ・自己分析・相手アンパイア・UMとフィードバックする（必要ならビデオ）

【4つの「C」】

- ・Control（感情をコントロールする）・Committed（心身共に打ち込む）
- ・Concentration（集中を維持する）・Confidence（自信を示す）

(4) Match Observation

- ・参加 19 名が 4 グループに分かれ、1 日目同様、グループ毎のテーマに沿ってスタンド観戦（第 2 試合：ニュージーランド 2-0 インド）、アンパイアリングで気づいたことは各自メモを取り、グループディスカッションに備えた。
- ・テーマは下記の通り（自分は GroupD）
GroupA：①笛 ②相手アンパイアとの協力
GroupB：①ポジショニング ②モビリティ ③ショウマンシップ
GroupC：①アドバンテージ・試合の流れ作り ②ゲームマネジメント
GroupD：①判定基準 ②ゲーム全体のコントロール
- ・当該試合以外の時間はフリータイムのため SAS Cup の試合を観戦した。
（結果）第 1 試合：オーストラリア 3-3 韓国、
第 3 試合：マレーシア 2-2 パキスタン



↑ピッチレベルの眺め（試合前）



↑ニュージーランドーインド戦

（手前は韓国の International umpire）

● 4 日目：3 月 15 日（金）

(1) Group Presentation on the Match Observation

- ・前日のニュージーランドーインドの試合観戦を経て、グループ毎のテーマに基づきグループディスカッションを実施、アンパイアリングの良かった点、悪かった点のプレゼンテーションを行い、他の参加者と質疑応答を行った。

(2) Forum –with TD,UM–

- ・SAS Cup の TD・Gary, Marsh（オーストラリア）、UM・Amarjit, Singh（マレーシア）が来校、TD・UM としてどのような箇所に気をつけて大会を進行、アポイントしているか（おおよそは前日までの「TD・UM の見方」に基づいたもの）、(1)のプレゼンテーション内容の感想等の話があった。



← 左から UM・Amarjit Singh（MAS）、
左から 2 人目が 3・4 日目の講師
Vasutheven Sasidharan(MAS)、
右が SAS Cup の TD・Gary Marsh（AUS）

※ TD の Gary, Marsh(AUS)は昨年 4～5 月に各務原で行われたオリンピック予選に TO として来日、大会運営を賞賛していました。

(3) Video Session

(担当講師：Vasutheven Sasidharan)

- ・日本で行っている全国統一ルール研修会のように、判定の正誤、各個人の見解についての議論を行うため、自分だったらどのような判定を下すか、チャンピオンズトロフィー等の国際大会のビデオを見ながら、参加者で議論を行った。

(例えば、PSの判定は合っているか？PCの判定が妥当か？
カードは何色が妥当か？故意の反則か？など)

(4) Ipoh City tour / Dinner (いずれもイポー市主催)

- ・この日は金曜日のために昼過ぎでレクチャーは終了、イスラム教徒向けに祈祷の時間が設けられ (イスラム教徒以外の参加者はフリータイム)、午後からはマレーシア以外から参加のコーチ・アンパイア向けにイポー市主催のバスツアーで、イポー市内観光 (森林公園・旧城址) を探索した。
- ・夜からは市内レストランに今回参加した全受講者が招待されてディナーが催され (格好はセミフォーマル)、地元のバンドも参加して民族音楽等の演奏もあり、食事と共に参加者の間で親交を深めた。



↑イポー市内の森林公園



↑旧城址・Kellie's Castle



↑パーティー前の様子 (手前はタイのジュニアチーム)



↑場を盛り上げたスリランカのコーチ参加者

● 5日目：3月16日（土）

(1) Beep Test（担当講師：Cikgu Kanaisan）

- ・研修施設内インドアホッケーコート（床は塩ビタイル？）でマレーシア・それ以外の国のアンパイアに分かれビーptest（シャトルラン）を実施。
※マレーシアはセミナー参加以外の Class1 アンパイアが集まり別途実施。

- ・3日目にあった Physical Training の段で記載の通り、日本とは達成基準が異なり当該レベルを「完遂する」＝国内基準で「1つ上のレベルに達する」ことでクリアとのこと。

- ・自分は基準（レベル9完遂）をクリアできたが、参加した umpire17名中、5～6名がクリアできなかった模様。

※ 自分は30代男性であるため、

国内基準ではレベル9まで達する＝73回を走ればクリアとなるが、

国際基準ではレベル9を完遂する＝84回走りきってクリアになる。



↑ビーptestの様子（マレーシアアンパイア）

(2) Managing controversial situations during matches

（担当講師：Vasutheven Sasidharan）

- ・試合中・試合前後に困難な状況に陥った際の対処法について、テクニカルな面・メンタル面の両面からのアプローチでグループディスカッションを行い、グループ毎にプレゼンテーションを行った。
- ・「困難な状況」とは例えば乱闘が始まったり、どちらかのチームが判定に不服でベンチに引き上げたり、といった通常は想定し得ない状況のこと。
- ・特に「選手に囲まれた場合」や「自分でミスジャッジだと分かった場合」等のシチュエーションでどう立ち振る舞うか（正しいという確信があれば絶対後ろには下がらない、選手に囲まれそう、と思った時点で（囲まれる前に）相手アンパイアを呼ぶ、相手アンパイアも助けるべき時は逆のことをする、もし試合が進んでしまっているのであれば、ネガティブな考え方は忘れてポジティブな言葉を言い聞かせるようにする、など）、様々な意見が出た。

(3) Written test（担当講師：Vasutheven Sasidharan）

- ・今回の講義項目に限らず、現在のルール全般について筆記テストを行った。英語版ルールブック（セミナーの最初に配布）を調べても構わないという条件で全て英語での問題が30問出題され、自分は27問正解＝正答率90%。他の参加者の点数を聞いた所、20問前後＝7割程度の正解が殆どだった。

（テスト問題の詳細については別添ファイルをご参照下さい）

※ この日のセミナーは筆記テストの時点で終了、フリータイムとなったため、その後の SAS Cup 予選リーグ最終日の試合をスタジアムで観戦した。

（結果）第1試合：パキスタン 2-2 韓国

第2試合：オーストラリア 3-2 ニュージーランド

第3試合：マレーシア 2-2 インド

※ 予選リーグ順位：①オーストラリア ②マレーシア ③ニュージーランド
④韓国 ⑤パキスタン ⑥インド

● 6日目（最終日）：3月17日（日）

- ・ Closing ceremony（閉講式）：セミナーに参加したメンバー全員が修了証書（「AHF Certificate of umpire」）を授与された。



↑壇上での証書授与の様子



↑アンパイアコース受講生・講師一同で記念撮影

- ・閉講式後解散となったが、ほぼ全員でその後の SAS Cup 順位決定戦を観戦。
（結果）5位-6位決定戦：インド 4-2 パキスタン、
3位-4位決定戦：韓国 2-1 ニュージーランド、
優勝決定戦：オーストラリア 3-2 マレーシア
- ※ 今回の大会期間中、セミナー受講者（coach/umpire）は招待者として、メインスタンド（屋根のありVIP席がある側）で観戦することができた。熱帯特有のスコールに見舞われて試合が中断することもあったものの、人工ミストも使われており、観戦自体は非常に快適に過ごすことができた。（余談だが、日本男子代表の姜ヘッドコーチも同じメインスタンドで観戦にいらしていたので、最終日に挨拶を交わしてきました。）



● 大会中のアンパイアリングで気になったこと（SAS Cupの試合全体で）

(1) 新ルール・運用変更

- ・日本国内は2013年4月開始の新ルールが適用。OWNゴールは観戦期間中で2回=1日（3試合）で1回出るか出ないか。サークル内に打ち込まれたボールにGKはスルーせず積極的に足で跳ね返す意識が非常に高かった
- ・「フリーヒット（FH）再開時に直接ボールを上げて可」については、オーストラリアを中心に、20~30mの頭越しにパスをする手段として（相手選手が5m内に行けないのを上手く利用して）使用しており、韓国は23m外から膝下に落ちるドラッグフリックでサークルに入れていた。（※ なお、期間中に講師の Sasidharan に FH でのドラッグは可か聞いた所、「全ての技術が許される」とのことで○の回答があったことを付記する）
- ・日本国内での2013年度からの新レギュレーションである、「FH再開時に5m離れていない選手がボールの5m動いた後であればアタックできる」については、ケースとしては殆ど見られなかった。

(2) 2013年ルールブックでの強調事項

- ・シールドイングについてはほぼ目にする機会がなかったが、IND-PAKの1回だけあったシーンで当該アンパイア (Marcin Grochal) が強く笛を吹き、選手に近づいて強いジェスチャーで「No」を示していたのが印象的だった。
- ・ハイスティックについては、ほぼ水平にスティックを持っていれば、肩より少し上に構えているように見えても反則を取っていないように思われた。(参加している選手のスキルが高く、実際に肩の高さで扱っているのに肩より上に「見える」だけなのかもしれないが、自分には基準が緩いように見えた)
- ・FH再開時のボール静止も、試合の序盤でFHの再開前に素早く2度笛等で強く吹いたりして未然にうやむやになるのを防いでいたものと感じた。
- ・DFが故意にバックライン側にボールを出す行為はあまり見られなかった。

(3) 相手アンパイアとの協力

- ・非常にレベルが高いニュートラルアンパイアの2人が入っただけに、今大会に限ったことではないかもしれないが、自身の判定に確信のない場合、躊躇せずに時間を止めて相手アンパイアと協議した上で判定を覆したり、選手に囲まれかけた相手のアンパイアを助けるためすぐ時間を止めて協議して再度同じ判定を下したりする判断、そしてそこに至るまでのプロセスが非常に早く行われていたと感じた。
- ・特に決勝戦では優勝候補オーストラリアと地元マレーシアとの対戦となり、様々な難しい事象が起こったが (ニュートラルの2人が担当)、その際の対処が違和感なく迅速・スムーズに行われていたのが非常に印象的であった。

- ① DFが23m内でFWを押していたのを当該アンパイアが見えておらず、ボールが流れてビハインドFHを示した後、反対サイドのアンパイアが当該DFにイエローカードを提示し、協議の上PCの判定に覆した
- ② 右サイドのコーナーから始まる際、コーナー付近を見ていたために視界から外れているゴール前のポジション争いのいざこぎを見ていた反対側のアンパイアが時間を止め、当該両プレイヤーにグリーンカードを提示
- ③ サークル外からの打ち込みにDF・FWが重なって入り、誰かに当たってボールがゴールインして、一旦はオウンゴールの判定をしたものの、すぐ(囲まれる前に)当該アンパイアが時間を止めて相手アンパイアに確認を求めた上で直ぐ様守備側FHに修正した(実際にはFW側のキックの反則)等、あまり見たことのない非常に高度な協力関係が作られていたと感じた。

勿論試合前のブリーフィングも入念に行われているだろうが、「この辺りは見えにくい」「こういう場面は助けてやらなければ」シチュエーションを常にシミュレートしているからこそ、こうしたコントロールはできないのではと感じる箇所が非常に多かった。

(4) 観客・チームに対するパフォーマンス

- ・特にニュートラルアンパイアの2人に言えることだが、数千人の大観衆を前にしても全く動じることなく、笛の強さ(強弱よりは強く短い/長い笛)とジェスチャーの大きさ・表情、近づく時と離れる時のアクションで反則の程度の重さを選手に知らしめる意識の高さが垣間見えた。
- ・相手アンパイアがPCの判定で選手に囲まれかけた際、高いポジションでPCシグナルの手を出し「I agree(その通り)」と示すアクションには驚いた。

● 大会戦績結果・チームの特徴等考察 (SAS Cup 参加チーム)

(1位) オーストラリア (2位) マレーシア (3位) 韓国
(4位) ニュージーランド (5位) インド (6位) パキスタン

- ・オーストラリアはロンドン五輪時と比べてメンバーを落とした「1軍半」で臨んでいたと思われるが、それでも体力・技術的には他のチームよりは優れており、劣勢でも終了間際に同点・決勝ゴールを挙げる等勝負強さが目立った。
- ・マレーシアは体格も日本人とさほど変わらない（むしろ小さいくらい）中、全選手がプレスを怠らず、ボールのない場所でパスコースを作るためのフリーランニングを欠かさず、単純なボールストップやパスの技術も高かった。
- ・マレーシアは全体的に若く得点王も 22 歳。マレーシアのアンパイアに聞いた所では、数年前からジュニア年代（中～高校生）の育成プロジェクトが盛んで、その年代がフル代表に上がり成績が上向いたとのこと（現在世界ランク 13 位）
- ・スタジアムはイポー市中心から徒歩 30 分程度だが、入場無料ということで、マレーシアの試合は立ち見が出るほど満員（約 5,000 人）。スタンドとピッチの距離も近く、試合を盛り上げる MC や音楽（PC 取得時等）も単純だが興奮させるもので、スタジアム外ではレプリカユニフォーム・マフラー販売がある等スタジアム一体の声援がマレーシアチームを後押ししているものと感じた。
- ・このような1つの笛で試合の行方が左右される、痺れるようなプレッシャー・環境の中で自分も吹いてみたいと感じ、逆にこの環境を乗り越える術として、言語は勿論、アンパイアとしての確固たる信念、個性、パフォーマンスを身につけるのが上に行くのに必要なことも肌で感じるように痛感した。

● 最後に

今回のこのセミナーに約 1 週間参加させて頂き、実際に国際大会で活躍しているオフィシャル (TD・UM・ニュートラルアンパイア等)、マレーシア協会の講師、国際審判員を目指す他国からの参加者から、高いアンパイアリング技術や向上心、そして今後更に奥の深い国際審判員の世界について、参加前より身近に感じることができ、これまで漠然としか抱けなかった「国際審判員になって世界で活躍する」という意識を参加前より一層高くすることができました。

講義内容はもちろん、セミナーと同時開催の SAS Cup で、オーストラリア等の高い技術レベルのチームのホッケーと、高いレベルのアンパイアリングが相まって、これまでテレビ・パソコンの前等でしか味わえなかったエキサイティングな試合が目の前で展開され、何千人の観客が一体で盛り上がるのを直に体感し、自分も早くこの舞台に立って、試合を作り出す一員になりたいと心から感じました。

一方、英語力の不足と他のアンパイア等とコミュニケーションを図る積極性等、課題が浮き彫りになったのも事実です。自分は国内レベルでは英語力が高い方とは思っていましたが、特にディスカッションを行う際の表現力の大きな差を痛感し、日が経つにつれて他の参加者と打ち解けたとは感じましたが、自分から話しかける積極性（+それを可能にするだけの語学力）については不足しており、そのための自信となる英語力の向上に更なる努力が必要であると感じました。

とはいえ、国内で味わうことのできない有意義な機会を授かることができたことに対し、参加に際しご推薦・ご尽力頂いた日本ホッケー協会審判部及び関係各位の皆様には心から御礼を申し上げますと共に、今回のセミナー参加により、今後自分が国際審判員になって上を目指していくことでこの恩返しをさせて頂きたいと決意を新たにしたいということをお伝えして、今回の報告書を締め括らせて頂きます。